

三者協働による上溝番田神代神楽資料の整理について

山本 菜摘*

* 相模原市立博物館

はじめに

神代神楽とは、面をつけて『古事記』や『日本書紀』の神話を演じる黙劇の芸能で、祭りなどで神に奉納される。相模原市の神代神楽は、神社の氏子によって行われるのではなく、「神楽師」と呼ばれる専門職が氏子からの要請を受け、その神社に出かけて行く。その元締を相模原市で代々続けてきたのが、中央区上溝の番田に住む亀山家である。

亀山家は「亀山社中」として、長年相模原市や座間市を中心とした地域で神楽の奉納を行い、昭和36年(1951)に市の重要文化財(郷土芸能)に指定され、平成13年(2001)には無形民俗文化財としても指定された。近年、「番田神代神楽保存会」を組織して活動してきたが、令和4年(2022)に解散となり、書状や面、衣裳等が相模原市立博物館へ寄贈された。また、社中が請け負っていた神楽の奉納は、厚木市を本拠地とする「相模里神楽垣澤社中」に引き継がれた。

当館に寄贈された書状や神楽道具は、500点以上にのぼるが、これらの資料について、相模里神楽垣澤社中の協力を得ながら、市民ボランティア「福の会」とともに整理を行い、その成果を令和6年(2024)7月13日(土)～9月8日(日)まで行われた民俗企画展「上溝番田の神代神楽」において初公開した。

本稿では、市民ボランティア、神楽師、担当学芸員(筆者)の三者協働での亀山社中の神代神楽資料の整理の様子を報告し、それによって得られた成果について紹介したい。

1. 上溝番田の神代神楽

神楽師の元締として、相模原市の神代神楽を代々継承してきたのは、上溝番田の亀山家である。元締は神楽の家元として神社や氏子からの依頼を受けて、祭礼で神楽を奉納した。

亀山家の先祖は「亀山日向正藤原安行、亀山豊後正藤原喜昌」とされ、九州の宮崎方面にいたのだが、江戸時代中期の元文年間の亀山齊宮の代に、相州上溝郷番田に住むようになったと伝わっている。亀山齊宮は苗字帯刀を許され、舞人であるとともに神職を務めていた

が、郷神楽ができるとその家元に命じられたという(相模原市総務局総務課市史編さん室 2010)。

それ以降、令和4(2022)年に解散するまで、亀山家は九代目まで脈々と受け継がれてきた。現在も亀山家は地域で神職的な役割を担っており、JR相模線番田駅近くにある持松稲荷の初午では祝詞を上げている。

2. 福の会

「福の会」は、有形の民俗・生活資料の整理を行うことを目的として、平成24年(2012)の秋に活動を始めた。基本的に第一・第三木曜日を活動日としている。

結成の契機は、南区下溝の福田家の蔵の中の資料が寄贈されたことである。福田家は小田原北条氏の家臣とされる旧家で、蔵は明治30年(1897)に造られたものであった。その福田家の「福」と幸福の「福」の意味を込めて、会の名称は「福の会」とされた。

最初の活動となった福田家の蔵の整理では、蔵からの資料の運び出しに始まり、洗浄、燻蒸、計測、写真撮影、資料カード作成、資料番号注記など、博物館に資料として収蔵されるまでの一連の作業を2年かけて行った。

それと同時に、新たに博物館に寄贈される資料があればその資料整理も同様に行った。

このような活動の成果を活かし、翌年の平成25(2013)5月25日(土)～6月30日(日)には、収蔵品展「蔵の中の世界・福田家資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」を開催した。展示に際しては、資料の選定からレイアウト、実際の展示作業、会期中の展示解説まで福の会会員自身が行い、市民がこのような活動を広く知ってもらえるよい機会となった(小澤・加藤 2014)。

また、平成26年(2014)5月24日(土)～6月29日(日)にも2回目の収蔵資料展「蔵の中の世界②～市民の力で博物館資料へ～」を行ったり(小澤・加藤 2015)、平成27年(2015)の博物館開館20周年記念展「こんなモノが集まりました—博物館20年の歩み—」においては、子どもの晴れ着や大正時代の霊柩車の展示作業などを手掛けたりもした。

それらに加えて、津久井郷土資料館の閉館に伴い、博物館に移動した民俗資料を収蔵庫内の棚に配架し、どの

棚にどの資料を置いたのか確認と記録化という重要な作業を行った。このことから、当館にとって福の会の存在は、なくてはならないものとなっているのがわかるだろう。

近年では、令和2年(2020)に当館が相模原市緑区久保沢で平成3年(1991)まで竹細工職人として活躍していた宇佐美幸治氏の竹細工道具一式の寄贈を受けた際、福の会がそれらの資料整理を行い、その成果が令和4年(2022)11月1日(火)～令和5年(2023)1月15日(日)まで行われた企画展「ようこそ!竹細工ワールドへ!!～久保沢最後の籠屋さん～」の開催につながった(山本 2023)。

3. 相模里神楽垣澤社中

厚木市を本拠地とする「相模里神楽垣澤社中」は、100年以上の歴史を持つ、家元世襲制の神楽社中である。

そのルーツは、古くから神事舞太夫の家系であった萩原家である。萩原家は愛甲神楽の家元であったが、後継者がいなかったため、姻戚関係の垣澤家が引き継ぐことになった。

明治45年(1912)に垣澤鹿造は相模里神楽垣澤社中を発足する。そして、昭和46年(1971)には、厚木市の無形民俗文化財に指定された。

現在は三代目家元の垣澤勉氏によって組織され、娘で次期家元の垣澤瑞貴氏が代表として舞台の企画運営及び指導を執り行っている。彼らは神社祭礼にとどまらず、地方・海外公演、学校公演、CM、テレビ出演、創作演舞、作曲、ワークショップ、講師など幅広い活動を行っている。

相模里神楽垣澤社中は解散前の亀山社中とも深く関わっていたこともあり、今回の資料整理に協力していただく運びとなった。

4. 寄贈までの経緯

平成10年(1998)八代目家元の亀山重好氏が急逝し、その後、長年裏方であった重好氏の配偶者であるタケ氏が九代目となった。しかし、社中メンバーの高齢化によって、実質的には相模里神楽垣澤社中が中心となって活動していた。

こうした状況の中、令和元年(2019)に番田神代神楽保存会から当時の相模原市文化財保護課(現・文化財課)へ、保存会の解散と指定解除の申し出があった。

なんとか解散を食い止めようと、文化財保護課と博物館、相模里神楽垣澤社中が方策を講じていたが、新型

コロナウィルス感染症の流行、通称「コロナ禍」によって計画はストップしてしまう。

その後、九代目のタケ氏が亡くなってしまい、令和4年(2022)に番田神代神楽保存会は解散となり、亀山社中が持っていた神楽関連資料が一括で相模原市立博物館に寄贈された。

5. 亀山社中の神楽関連資料

神代神楽の文書を除いた資料調査は、昭和63年(1988)に当時の社会教育課博物館準備係によって行われている。相模原市立博物館に残されたその際のデータは、面と地芝居の装束のものだけである。スケッチに法量が書き加えられたもので、各資料の詳細については残されていない。また神楽の装束や採物などについてはデータが残されていないため、それらの調査がなされたのかは不明である。

それ以降は、平成30年(2018)に神楽面を展示するにあたって再調査が行われた。具体的には、当時の亀山社中家元に対し、神楽面について、面の名前やどの面がどの役に使用するのかを確認している。

このように、亀山社中の神楽道具は、簡単な紹介はあったものの、調査は昭和63年以降ほとんど行われていなかった。

さて、当館に寄贈された書状や神楽道具は、資料数548点にのぼる。その内訳は、紙資料180点、装束等173点、採物29点、面54点、その他112点であった。その中でも、明治9(1876)年と記されている「神楽免許状」は、県内では亀山家のみ現存する資料であり、大変貴重なものである。

亀山社中の神楽道具は、現在では購入することの多い装束等も多くが手作りされている。舞台ではきらびやかに見える装束も、亀山社中の人々がすべて手縫いで用意した。

型が古いことから戦前のものも含まれている可能性が高く、装束については、現在の舞手が身に付けると、裾が短いのが一目瞭然であった。

これらの道具は、亀山家が保管してきたが、奉納場所に向かう場合は、すべての道具を持参し、現場で広げて使用するものを探したという。それは当日現場に行き、集合した神楽師たちを確認してから、演目や配役を決めるためである。

神楽道具の手入れや保管には多大な労力が必要であり、これだけの量のものが修繕されながら残されていることから、神楽に対する情熱が窺える。

6. 寄贈後の資料整理と企画展

亀山社中の神楽関連資料が当館に寄贈されたのは、令和4(2022)年3月のことであったが、福の会によって資料整理がはじまったのは、令和5年(2023)4月からである。当初は、面、文書、小道具、装束の順で整理していき、資料整理の成果報告として1年に1回展示を行う計画であった。

7月1日(土)には亀山社中の関係者に来館していただき、面についての基本的な情報や書状の事実確認について聞き取り調査を行った。10月29日(木)は前回と同じ亀山社中の関係者と亀山家の方に来館していただき、資料整理の過程で浮上した疑問点を氷解させるべく、聞き取り調査を行った。特に亀山家の姻戚関係についてご教示いただいた。

11月からは相模里神楽垣澤社中家元の垣澤勉氏、その娘で次期家元の瑞貴氏から協力を得られるようになり、プロのカメラマンによる撮影が開始された。12月から2月の間、設備工事のため、相模原市立博物館が休館中の際には、大会議室とホワイエを使用し、整理作業を行った。

資料の写真撮影にあたっての課題は、装束のシワの処理であった。福の会会員だけでは手が足りず、職員の家族や市民学芸員(専門分野を持たない、博物館全体のボランティア)の有志からの助力も得た。

その後、令和6年(2024)3月から6月は、神楽の道具について、垣澤氏を講師として勉強会を行い、7月13日(土)から民俗企画展「上溝番田の神代神楽」が開始したのである。

7月13日はオープニングイベントとして「プラネタリウムで神楽「神話から見る神々の世界」と題し、当館のプラネタリウムで相模里神楽垣澤社中による神楽を公演した。その際、資料の写真撮影で助っ人としてアイロンがけをした市民学芸員のほとんどが、公演を観覧した。資料整理に関わったことが、神楽へ興味を持つきっかけになったと思われる。

7月28日(日)は、國學院大學名誉教授の小川直之氏を講師に招き、「日本の神楽と神代神楽」という演題でご講演をいただいた。

8月12日(月祝)と13日(火)は、担当学芸員(筆者)と相模里神楽垣澤社中によるギャラリートークが行われた。特に12日は垣澤勉氏と瑞貴氏の両名が参加され、お二方それぞれの視点から解説をいただくことができた。

8月13日(火)と20日(火)には着付け体験ワークショップも行われ、こちらも盛況であった。

最終的に本企画展の観覧者数は、15,000人以上となり、多くの方に亀山社中及び神楽を知っていただく機会となった。

おわりに

ここまで見てきたように、亀山社中の神代神楽関連資料は、資料整理から企画展の準備、企画展の関連イベントまで、福の会、里神楽垣澤社中、担当学芸員(筆者)の三者によって行われた。この一連の活動を通して、互いに影響を及ぼし合い、よい変化が生まれたといえる。

市民ボランティアは、直接神楽師から話を聞くことで、その世界についてより深い理解を得ることができたという。また、1年以上とともに活動してきたことで、神楽師と仲良くなり、演者のファンになった者もいた。

中には神楽そのものに興味を持つ会員も現れ、個人的に過去の動画を視聴したり、SNSをフォローしたりするなど、積極的に相模里神楽垣澤社中を応援するようになった。会員の一人が「この年で、こんな体験ができるなんて」と感動していたことは、筆者にとっても印象深かった。

一方、こうした市民ボランティアの反応を神楽師から見ると、応援してくれる人々が増えたことになる。多くの民俗芸能が後継者不足や資金不足などで、継承が難しくなっている中、神楽もまた同じような問題に直面し、様々な取り組みを行っている。このような状況下で応援してくれる人を一人でも増やすことは重要であり、その一端を本活動が担えたと思われる。

更に神楽師側にとっては、学芸員や市民ボランティアという第三者に対して資料の説明をすることで、日常で無意識に使い分けていた言葉を改めて考える機会にもなったようだ。例えば、同じ面でも場面によって「オカメ」と「天太」と呼び方を変えているが、これは無意識に呼び方を変えていたものだったらしい。

加えて、垣澤勉氏による昭和や平成時代の活動についての話は、娘の瑞貴氏にも学ぶ点が多かった様子である。

資料整理だけではなく、企画展に関わったことも社中の活動に変化をもたらした。展示設営にも携わったことで、その経験を活かし、相模里神楽垣澤社中展示会のブラッシュアップにつながった。また、関連イベントとして行ったプラネタリウムでの神楽公演の実績によって、別のプラネタリウムでも公演を実施する予定だそうだ。

これまでも筆者は市民ボランティアとともに資料整理やその成果としての企画展を開催してきた。だが、今回の亀山社中の神代神楽関連資料の整理には、非常に多くの場面で市民ボランティアの協力が必要であり、改めて博物館における彼らの存在の大きさを痛感した。

また、自分では気付けなかった疑問を市民ボランティアが神楽師に尋ねるという場面もあり、新たな視点を提供してもらうこともあった。

神楽師との協働は初めての試みであったが、目の前の資料に対して直接質問ができることで、資料整理や調査が円滑に進み、より多くの知見を得ることができた。加えて、当館での次のイベントなど、今後の活動につながる縁も結ぶことができた。

博物館の役割は、時代によって変わってきた。本活動では、単に資料整理や調査だけではなく、博物館が地域住民と伝統文化を結びつけるハブ的な役割も担ったといえる。こうした活動が、今後の地域の活性化につながっていくのではないだろうか。

参考文献

小澤葉菜・加藤隆志「相模原市南区下溝の福田家の来歴とその蔵などについて 付 下溝地区・福田家の蔵収蔵資料の整理について～市民協働による資料整理の試み～」『相模原市立博物館研究報告』第21集 2013

小澤葉菜・福の会／加藤隆志・水曜会「『市民の会』による展示の記録 ～「福の会」及び「水曜会」の平成25年度収蔵品展～」『相模原市立博物館研究報告』第22集 2014

小澤葉菜／加藤隆志「『福の会』の活動について」『相模原市立博物館研究報告』第23集 2015

加藤隆志「市立博物館の歩み〈No.3〉～民俗分野の市民協働～」『相模原市立博物館研究報告』第27集 2019

相模原市総務局総務課市史編さん室『相模原市史 民俗編』2010

山本菜摘「市民協働による竹細工道具資料の整理活用について」『相模原市立博物館研究報告』第32集 2023

参考 写真でみる搬出から整理作業の流れ

(1) 令和4(2022)年6月3日 亀山家から博物館へ搬出



写真① 亀山家敷地内の物置に収められていた。(令和4年6月3日撮影)



写真② 物置から亀山家の家屋に運び、中身を確認する。(令和4年6月3日撮影)

(2) 令和5年(2023)2月1日 全体確認



写真③ 特別展示室にて行った。(令和5年2月1日撮影)



写真④ 箱をナンバリングし、中身を並べ撮影。(令和5年2月1日撮影)

(3) 令和5年(2023)4月～ 写真撮影・資料カード作成①



写真⑤ 写真室で資料の撮影を行う。
(令和5年6月1日撮影)



写真⑥ 作業室で資料の撮影および計測を行い、資料カードに記入していく。(令和5年6月29日撮影)

(4) 令和5年(2023)12月～2月 写真撮影・資料カード作成②



写真⑦ 博物館休館により、長期間の大会議室使用が可能となり、広い場所を必要とする資料の整理が可能になった。スムーズに撮影するため、資料を大きさ(種類)ごとに並べる。
(令和5年12月7日撮影)



写真⑧ 装束は撮影前にアイロンがけを行ない、シワを伸ばす。(令和6年1月25日撮影)



写真⑨ プロのカメラマンによる撮影。写真室では対応できない大きさの資料はホワイエを使用し撮影を行った。(令和5年12月7日撮影)



写真⑩ 役ごとの装束の撮影。(令和6年2月15日撮影)